

➤ エスペラントに共感した北一輝

山鹿泰治に会った北一輝はエスペラントに非常に関心を持ちました。

北は、辛亥革命に参加した宋教仁ら中国の革命家らと交流し、階級制度の廃止や労働組合のなどの社会主義に傾倒する一方、著作『日本改造法案大綱』では、クーデターを起こし戒厳令を敷き、強権による国家社会主義的な政体の導入などを主張しました。そのため政府からは危険思想家として見られていました。しかし、一部の革新将校らには大きな影響を与えました。

1936年、北に影響を受けたであろう青年将校らは二・二六事件を起こしました。政府は、事件を起こした青年将校らが『日本改造法案大綱』に感化され決起したとみなし、北を「事件の理論的指導者の一人」として、首謀者の一人とされた陸軍少尉の西田税らとともに銃殺刑に処しました。そのような北が山鹿に会いエスペラントに共感したのです。

北の『日本改造法案大綱』には、「英語を廃してエスペラントを課し第二国語とす」と書かれています。その理由を北はこう書いています。

「英語は国語教育として必要にもあらず、また義務にもあらず。現代日本の進歩において英語国民が世界的知識の供給者にあらず。また日本人は英語を強制せらるる英領インド人にあらず。英語が日本人の思想に与つつある害毒は英国人が支那人を亡国民たらしめたるアヘン輸入と同じ」で、英語を駆逐することは、国家改造にとって急務であるとまで言い、「成年者が三月または半年にて足る国際語（エスペラントのこと）の修得が、中学程度の児童、一、二年にて完成すべきことは、英語が五年間没頭してなお何の実用に応ずる完成を得ざる比にあらず。児童は国民教育期間中に世界的常識を得べし」と書いてエスペラントを国際語とし

て非常に評価したのです。もし二・二六事件が成功し、北の影響を受けた青年将校らの主導する政府が成立したら、日本は外国との交流にエスペラントを使っていたかもしれません。

➤ SATの創立者ランティの来日

北は天皇を利用し天皇の命令によって革命を起こそうと考え、革命を人民から切り離し、ファシスト的な傾向があった故に私は、北を擁護する気にはなれません。しかし英語偏重主義を批判し、エスペラントを国際語として活用すべし、と言った彼の主張には耳を傾けるべき点があるかと思えます。

山鹿は北と親しく付き合う一方、エスペラント活動も衰えることなく積極的に海外のエスペランティストと文通していました。その中の一人にE・ランティがいました。

ランティはSAT（全世界無国民性協会）の創立者です。SATについては以前にもここで紹介したことがあります。SATのSはSennacieco「無国民性」です。国家や国民、民族という単位を認めず、国家に支配された世界のほとんどの言語＝国語、国家語に対峙するものとして、エスペラントを被支配者、解放の言語としてとらえていました。SATはそういう考えに共鳴した人たちのエスペランティストの世界的組織です。

日本に限らず、世界のエスペランティストたちの中には、政治や社会に関わらないでおこう、ただエスペラントを普及

することがエスペラント運動であるという人たちと、社会に関わり平和運動や国際的な連帯活動としてエスペラントを考えるという人たちの二つに大きく分かれています。多くのエスペランティストは中立主義の名のもと、政治や社会に積極的に関わりたくしません。ランティは、アナキストとして社会の進歩と変革のために闘おうとSATを創立し、また反戦

第21回 中国の大連に飛び立つ 山鹿泰治Ⅲ

ジャーナリスト、方正友好交流の会事務局長、著書『ある華僑の戦後日中関係史』

大類 善啓（おおるい よしひろ）

主義者でアナキストでしたので、やはり共産党系の人たち、いわゆるボルシェビキ派とも当然、対立していました。

そのランティが1936年(昭和11年)2月、前触れもなく突然、日本にやってきたのです。旅券には本名のE・アダムとあったので横浜税関はランティと気づかず、なんなく入国できました。しかしエスペラント学会を訪問したところ、誰かが警視庁に知らせたようで尾行がつかまりました。

山鹿はこう書いています。「私とランティは、10年も前から文通していた。ランティが会いたいと言っていると聞いて電話をかけると、ランティは私の注意通り尾行をまいて、車でやってきた。会ってみると、前に写真で見た彼とは全然違って、白髪の老人だった」。

ボルシェビキ派と対立し、警察にまで追われる身になったランティは亡命先を求めて日本にやってきたのです。仏教にも関心があったこともあり日本に来ましたが、日本の警察は彼の活動を許しませんでした。ランティはその後日本を去り、ニュージーランドへ行き、さらにメキシコに渡り、そこでピストル自殺をして波乱の一生を終えました。

▶ スペイン戦争勃発

1936年7月、スペインで戦争が起こりました。スペイン人民共和国政府に対して北アフリカのモロッコに駐屯していたフランコ将軍が反乱を起こしたのです。人民共和政府部内にもいる軍部やカトリックなどがフランコ側につきました。さらにフランコは、ヒトラー・ドイツに応援を求め、またムッソリーニ率いるイタリアもフランコを応援しました。

これに対して世界の進歩的な人たちは、「ファシズムを許さない」と立ち上がり、義勇兵として多くの知識人たちが反フランコの闘いに参加、アーネスト・ヘミングウェイやジョージ・オーウェルのような作家やエスペランティストたちも反ファシズムの闘いに加わりました。アナルキスタ・ロートというエスペランティストたちの中隊もできて勇名をはせました。

もともとスペインではアナキストの力が強く、

このスペイン戦争では、人民戦線派とファシズム陣営との闘いになりましたが、この人民戦線派、共和国軍の中にはアナキストの力も大きく、カタロニア地方ではアナキストが束ねる地域が生まれました。

ジョージ・オーウェルは後に『カタロニア讃歌』を書きました。1960年代の半ばに日本でも翻訳され出版されたこの本を私は読み、いたく感動しました。オーウェルは、フランコ派やスターリン主義者たちを追放し、アナキストたちが創り上げた瑞々しい反権力の小宇宙をこの本で活写しています。しかしこのカタロニアも最後はフランコ派に倒されました。

山鹿は義勇兵になってスペインへ行きたいと思いました。しかし渡航する方法がありません。山鹿はパリのセンターに、日本には外人部隊で働こうというものが数十人はいると言いました。しかし返事は「志はありがたい。だが手にする武器がない。武器を買う金がほしい。義金を集めるために闘ってくれ」というものでした。そして遂に革命派は敗北しました。

▶ 戦後の山鹿泰治

その後山鹿は『老子』のエスペラント訳をし自家版100冊を印刷した後、あてもなく台湾の高雄に移住、高雄で日本の敗戦を迎えました。

1960年12月、インドのガンジーグラムで開催された戦争抵抗者インターナショナル・WRIの第10回国際大会が初めてアジアで開かれました。当時はまだ自由に海外へ行けない時代ですが山鹿は参加すべく動きました。しかし外務省は「インドでアナキズム運動をされると困る」と言い、なかなか旅券を出しません。しかし山鹿は「私はアナキストだ。それと同じようにエスペランティストだ。そして平和主義者だ。今度インドへ行くのは、WRIの大会、平和運動のためだ」と主張、旅券を獲得したのです。

平和活動に徹した山鹿ですが、翌年、脳出血で倒れ、半身不随になりましたが、「たそがれ日記」を書き続けた異色のエスペランティストも1970年12月、千葉県市川市の寓居でひっそりと亡くなりました。享年78歳でした。